

北村透谷の 憑依と覚醒 岡部隆志 回復

生命、此語の中にいかばかり深奥なる意味を含む。宗教の泉源はたにあり之なくして教あるはなし。之なくして道あるはなし。之なくして法あるはなし。真理、世上所謂真理なるもの、果



事を意味する。ソクラテスも靈魂不朽を説かざれば、一個の功利論者を出るに過ぎざるなり。孔子も道は適きにありと説かざれば、一個の蔽匿者たるに過ぎざるなり。道は適きにありと言ひ

の、即ち、人間の秘奥の心宮を認めたるものなり。靈魂不朽を説きたるもの、即ち生命の泉源は人間の自意識にありざるを認めたるものなり。内部の生命あらずして、天下豈、人性人情なる者

北村透谷の

憑依と覚醒

岡部隆志

Okabe
Takashi

回復

おか べ たか し
岡 部 隆 志

1949年 栃木県に生まれる
1985年 明治大学大学院修士課程修了
現 在 駿台予備校講師 大東文化大学・共立女子短期大学非常勤講師
共 著 『天皇制入門』1990 JICC出版
『王権の基層へ—叢書史層を掘る第III巻』1992 新曜社
論 文 「戸をめぐる表現の位相」(『古代文学』第25号)
「現在としての霜月祭り」(『古代文学』第29号)
「呼応する歌」(明治大学『文芸研究』第59号)
「浮雲論」(明治大学『文芸研究』第63号)

北村透谷の回復

1992年12月31日 第1版第1刷発行

Printed in Japan

著 者 岡 部 隆 志

©1992年

発 行 者 畠 山 滋

印 刷 所 (株) シ ナ ノ

製 本 所 東 京 美 術 紙 工

発行所 株式会社 三 一 書 房

東 京 都 文 京 区 本 郷 2—11—3

電 話 03(3812) 3 1 3 1 ~ 5 番

振 替 東 京 9 - 8 4 1 6 0 番

郵便番号 1 1 3

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

ISBN4-380-92255-3

北村透谷の回復——憑依と覚醒——

目次

第一章	何故透谷なのか	5
第二章	透谷は敗北したのか	31
第三章	透谷の身体	56
第四章	透谷にとって恋愛とは何だったのか	84
第五章	透谷にとってキリスト教入信とは何だったのか	111
第六章	魔力に憑かれる透谷	122
第七章	憑依と覚醒	135
第八章	境界線上の生	153
第九章	透谷にとって手紙とは何か	175
第十章	入神体験から第二の「秘宮」へ	193
第十一章	生きられている自家撞着	207

終章

北村透谷の回復

あとがき

242

224

北村透谷の回復

—— 憑依と覚醒 ——

第一章 何故透谷なのか

北村ミナ様、このようにあなたにあてて手紙を書くようになるとは夢にも思っておりませんでした。とにかく、あなたはわたしの生きている時代にはいらっしやらないのですから。実は、今、わたしは、透谷について考えてきたことを書こうと思っているところなのですが、そこで、あなたに手紙を出したら、と思いついたのです。どうして、こんなことを思いついたかと言いますと、それは、わたし自身の姿勢の問題なのです。わたしは、透谷について今まで書いていたことは書いていたのですが、最近、どうしても透谷論を書く自分自身に違和感を感じるようになってきました。わたしは、国文学を専攻する研究者というように一応世間には説明しているのですが、その実は、実証性を大事にする研究論文のような文体が苦手なわけが、研究論文のようないかげんな研究者なのです。書き始めると、研究論文のような文体ではなく、どうしても、自分という主体を残存させたまま抽象的思考の説得性に賭けてしまうような文体になってしまうのです。世間では、こういう文体を評論の文体と言うようです。五年程前、最初に透谷についての論を書き始めたとき、それは、研究論文のような体裁で書き始めたのですが、書いているうちに、だんだんと評論的に語っていることに気づきました。ま

あ、これでいいやと思って、そのまま透谷について好き勝手に書いておりました。が、今度、透谷論をまとめようと思って書き始めたとき、どうもわたしは、この自分の姿勢に物足りなさを感じ始めたのです。

当初、何が物足りないのかよくわかりませんでした。そのうち、この物足りなさは、自分のなかで何かが抑制されていることにあると気づきました。その何かとは、透谷を論じる自分というものでした。つまり、もっと自分を出そうとして透谷を論じながら、その実巧みに自分を抑制していたことに気づいたわけです。そこで、もっと徹底して自分を出してみたらどうなるか、という誘惑にかられたのです。そこで、手紙という形式で書こうと思いついたのです。手紙なら、徹底して自分を出せるかも知れない。その上で、透谷について書いたら透谷像はどうなるか、それを見てみたい誘惑にかられたのです。

それで、手紙という形式にのせて透谷論を書こうと思いついたのですが、考えて見れば、勝本清一郎の手による、あの透谷全集のなかで、あなたと透谷の父にあてた透谷の手紙以上に、読み手を惹き付ける文章はないと思います。つまり、透谷にとって最も魅力ある文章は手紙の文章だと言えるわけです。そのように考えますと、この試みも、透谷を論じるにはよい方法かも知れないと思うようになります。透谷の手紙の文章は、その文体も含めて、透谷を論じるうえでとても重要なものなのです。それなら、手紙という形にのせて透谷論を書き進めるなら、その重要さに少しは近づけるかもしれないと考えたわけです。

そういうわけで、わたしは手紙という形式でこの論を書き進めることにしたのですが、ところが、

一体誰に手紙を出すのか、そのことに今度は悩みました。手紙を書くことが先にきまって差し出す相手が決まっていけないというのはまったくおかしい話です。最初、透谷が出したように恋人か父親あてにするべきなのかと考えましたが、すでに四十を過ぎて、妻ある身のわたしが恋人あてに手紙を出すというのも、おかしいものです。不倫云々を気にすることではなく、悲しいことに、そういう状況の想像力が湧かないというべきでしょうか。父親はすでに他界しておりますが、やはり手紙を出す気にはなれません。だいたい、肉親に対して、長い手紙を書くということ自体がわたしには信じられないことです。かつて学生運動でつかまり、拘置所から両親に手紙を書いた位が唯一の長い手紙だったと記憶していますが、その文面は、個人的なことというより、経過説明や心配しないでほしいと言ったあたりのことだったと思います。他の手紙は、それこそ「金送れ」といった類いのものだったと思います。だいたい、肉親への手紙なんてそんなものでしょう。自分の内面を披露するような手紙なんて普通書かないでしょう。それを書いた、というところに、透谷の手紙の特異さがあるように思われるのですが、それは後の課題として、とにかく、誰に向かって手紙を出すのか、それが問題でした。

そこで思いついたのがあなたでした。考えてみれば、あなたはすでに歴史上の人物なのだから手紙を出すのに誰にも遠慮はいらないのだし、それになによりも、透谷の重要な手紙はあなたに書かれたのですし、あなたは、透谷と生活をともにし透谷の最後を見届けた人です。へんな理屈ですが、わたしの透谷論を手紙として受け取ってくれる相手はあなた以外にはいない、と思いました。それで、ぶしつけだとは思いますが、あなたをわたしの透谷についての考えを聞いてもらう唯一の相手

として決めてしまい、このように手紙を出すことにしたのです。

北村ミナ様、わたしはあなたの生涯についてある程度の知識を持っておりませんが、ここで手紙を出す相手としてのあなたを、何処に住んで何歳になっているというように特定したくはありません。それは、今のわたしにとって、北村ミナという存在は、時代を越えて抽象化されてしまっていて、透谷と結婚した人でもあり、透谷の自殺を見届けた人でもあり、子供を残してアメリカに渡った人でもあり、また、たぶん霊界でこのわたしの生きる現代という時代を冷ややかに見ている人でもあるからです。とても、それらの場面のどれかを選ぶことはできません。できるなら、透谷の時代とともに生き、そしてどこかでいまだに生き続けている人としてのあなたに手紙を出したい。そういう思いです。だから、ここでわたしが手紙を差し上げるあなたは、わたしにとって言わば年齢を超越した存在であるということを、おことわり申し上げておきます。

ところで、何故、わたしが透谷論を書かねばならないのかについても言うておかなければならなと思います。「君は透谷のように生きることを願うか」は、桶谷秀昭の透谷論にある言葉です。現在、このように「生きることを願う」人はだれもいないでしょうから、もう、このような問いかけ自体死にかかっているという気がします。でも、われわれの世代（四十代）以上のものにとつては、懐かしい問いかけがあります。

考えてみれば、透谷は、誰もが青年期に多少は持つ挫折の体験を、本当に深く体現している存在だとも言えます。透谷ほど、青年期のはらはらするような純粹さにぴたりと合うような人はいな

いでしよう。近代の青春というのは、誰もがはらとするような青年期を傷つきながらぐり抜けることであつたと言えます。そして、誰もが、その青春に決別をする。その時なにかを喪失したという思いをくすぶらせたまま、日常の生活にまみれて年老いていくわけです。だから、誰もが、自分の青春に対してあるうしろめたさを介して振り返る、というのが、基本的なわれわれのロマンティズムです。青春というはらはらした時期の危うさのなかで斃れてしまった透谷は、まさに、われわれのうしろめたさを刺激するということでしよう。つまり、透谷を読むとき、われわれはどこかで青春期を振り返るといふロマンティズムと重ねてしまっているのです。だから、われわれにとって透谷の「生」とは、そのように生きるはずだったのに生きることができなかった「生」であり、また、すでに失ってしまつて二度と繰り返されることのない「生」ということになるのでしよう。だからこそ「君は透谷のように生きることが願うか」という言葉が吐かれるのだと思います。現在のこの時代に、そのように振り返るほどの青春と言ったものがあるのかどうか、わたしにはよくわかりません。たぶんないと思うのですが、即断は危険かも知れません。でも、今の若者より桶谷との世代的な距離の方が近いわたし自身には、少しはあると思っています。だから、気恥ずかしい言葉ではありますが「君は透谷のように生きることが願うか」という問いかけはわからないではありません。

わたしが透谷を最初に読んだのはいつか忘れました。ただ、透谷という存在に興味を抱いたのは、桶谷秀昭の『近代の奈落』や北川透の『北村透谷試論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』三冊を読んだときです。この時、透谷が違和というものを抱え、それを激しく文学というものに結実化した存在だということを、い

やつというほど知りました。それ以前に透谷は読んでいたのですが、正直言ってそれほど感動したという覚えはありません。そのようなわたしは何故透谷について書くのか、と思われるかも知れません。透谷について本格的に読み始めたのは、大学院に入って中山和子という近代文学を専攻している先生のゼミに出てからです。わたしが大学院に入ったのは三十二歳の時でしたので、言うなら、青春期とはとても呼べない時に、それも、ゼミのテキストとして読み始めたわけです。ちなみに、わたしの専攻は古代文学で古事記や万葉集を専門に勉強していたときのことです。しかし、授業のためとは言え、わたしは不思議に透谷に熱中することになりました。その理由の一つは、たぶんにわたしの年齢という問題があったかも知れません。二十代前半の時確かにわたしは透谷を読んだ記憶があるのですが、その時の印象を覚えていないということはたぶんつまらなかったか、よく理解できなかったのでしょうか。なにしろ、あの漢文体の文章は一筋縄では読みこなせませんから。しかし、大学院の授業で読んだときには、何故か、透谷のいろいろなことがわかったような気がしたのです。それは、桶谷秀昭や北川透の本を読んでいたということもあり、また、中山先生も優れた「透谷論」を書いていらっしやる方でしたから、理解するための知識の多くを与えられていたということはあります。でも、今考えると、それは、やはり、自分の青春期を振り返るようなまなざしを持つ年齢になったことが一番大きかったと思います。

ある作家を理解するとき、その作家と自分とが重ねられれば、その作家のことはかなりわかったという気になるものです。ただ、そのためには、自分とはこういうものだというある自己像への認識が必要でしょう。この自己像は様々にあり得ると思いますが、特に、透谷の場合、青春期その

ものの不安定さと過剰さとを刻みつけた像としてあるわけですから、その像に重なる青春期の自己像の塑像には、自己を振り返るための時間という距離が必要なのだと思います。わたしが透谷を読んでわかるようになったということは、一つは、その時間を確保できたからです。つまり、透谷に割合似た像として自分を塑像できるようになったということだと思います。「透谷は自分だ」と言ってしまうとなにやら気恥ずかしいのですが、そのような思いはやはりその時はあったと思います。中山ゼミには、わたしの他にも七、八人の学生がおりましたが、わたしのようにはスムーズに透谷を理解できませんでした。それは、たぶんにわたしより十歳は若い、透谷とほとんど同じ年代のものたちであるということが大きな理由だったでしょう。彼らは、透谷の思想を、自分の思考のレベルと拮抗するものとして論じていました。つまり、彼らは、透谷を理解するというより透谷に對抗していたという印象です。でも、わたしは、かつての自分を振り返るまなざしで透谷を見ましたから、所詮、わたしの透谷像のほうが鮮明であつたのです。

しかし、透谷を自分の青春期に重ねたからと言って、それで、透谷がわかるというものでもないということはよくわかっています。問題は、そのようにわかつてするこちらの内発的な力が問題なのです。透谷がよく理解できたということは、そのような力がある必然として自分のなかにあつたからでしょう。それは何か。しかし、よくわかりません。『北村透谷』について本を書いてしまふ、北川透や吉増剛造や菅谷規矩雄のような、何事かを語ってやまない詩人の情熱をことさら持っているというタイプでもありません。自分の中にある世界への違和の問題だと語ってしまえば、割合簡単に説明はつきそうですが、それじゃその違和とは何かと問われると、心もとなないというこ

とがあります。それじゃ何が力になったのか。たぶん、断念の問題だという気がします。自分への断念です。

ここで、多少、わたしの自己史をお話ししなければならなかったようです。断っておきますが、これは、自分への断念をロマンティズムとして語ってしまわない用心のためにです。

わたしは典型的な全共闘世代です。出身は宇都宮ですが、そこで浪人していた一月のある日、テレビで東大の安田講堂が全共闘の学生に占拠され、機動隊によって攻撃されているのを見ました。別にショックを受けるわけでもなく、東京の大学は大変だなという感想でした。その年にどうにか滑り止めに受けた東京のある私立大学に合格しました。ところが、入ってみると、大学は学校側によって学校全体が鉄板で閉鎖されていて、学生はいちいち学生証を見せないと学校に入れないという異常な状態にありました。封鎖の理由は全共闘の学生を排除するためです。新学期が始まると、全共闘の学生が学校側の封鎖解除と授業粉碎を叫んで教室に乗り込んでくるようになりました。ところがある日、学校側が全共闘の学生を排除するために学内に機動隊を導入し、全共闘ではない一般の学生も逮捕されるという事件が起きたのです。それをきっかけに、今度は全共闘の側が大学をバリケード封鎖するまでに学内全体が盛り上がりました。わたしが全共闘の運動に加わったのはこの事件に怒ったためです。それから、わたしは授業を受けるのではなく、授業を粉碎する側にまわり、授業料も払わず大学を除籍されるという経過をたどります。こんなことを書くのは、まずわたしが全共闘に入るきっかけを明らかにしておくためです。透谷の自由民権運動へののめりこみがどういうきっかけによってであったかはわかりませんが、たぶん、時代の大きなうねりのようなも

のから外れまいとしたということは言えるでしょう。わたしもまたそうでした。少なくとも、ある理念があつて学生運動にかかわつたではありません。ただ、この後、わたしは大学の全共闘活動家に誘われてある党派に属することになります。つまり、多くの活動家がたどる典型的なコースを歩いていたわけです。その意味では、わたしは、自分の活動の根拠を理念として考える機会を持つたと思うのですが、今考えると、ほとんど考えたことがなかったことに気づきます。当時わたしたちの党派ではやつた言葉は「行為の共同性」でした。行為という、理念ではない何かに、生きることの充実を確かめていたということなのだと思います。わたしの属す党派は四分五裂し小さな内ゲバを繰り返しました。それにいくぶん嫌気がさしたわたしは、当時成田空港反対運動の拠点だった三里塚に入り、現地の活動家として空港反対運動に専念しました。

三里塚では二度の強制代執行が機動隊を使って行われ、その度に、反対同盟の農民や支援の学生が体を張って、あるいは火炎瓶などの武器を持って抵抗しました。そのなかで、警官や学生の犠牲者を出し、多くの農民学生が逮捕されました。わたしも逮捕された一人です。代執行が終わり、現地にいる活動家に逮捕状が出るらしいという噂がひろまり、わたしは現地を離れ逃亡生活を送つたのですが、あきらめて実家に帰り、その実家で逮捕されたのです（もともと逮捕状が出たというのは噂でしかなくわたしの逃亡劇は徒労だったのですが、権力はそうは甘くなく、しばらくしてからちゃんと逮捕状を持ってやってきたのです）。それから、長い裁判が続きます（われわれは裁判闘争と呼んでいました）。逮捕されたのは、一九七一年。翌年から裁判が始まり、その裁判が結審し判決の出たのが、一九八六年のことです。わたしはかなり重い求刑で実刑を覚悟していましたが、

どういうわけか執行猶予になりました。そのおかげで、このようにあなたに手紙が出せるというわけなのです。逮捕されてから半年ほどして保釈されたわたしは、活動家の生活から離れ（もつとも、わたしの属した党派は職業革命家は作らないとか、党派的思想の解体とか、自己矛盾の方針を出していましたので、その矛盾に耐え切れず、数年後に解体宣言を出してつぶれてしまったのですが）、実家で両親と暮らしながら、仕事と月に一度の裁判を続けて行く生活が始まったわけです。実家のある宇都宮で数年働いた後、東京によい就職口がみつかり、わたしは再び上京しました。その職場は仕事が楽だったこともあって、わたしは大学にもう一度入り直そうと考えました。そこで、お茶の水にある大学の二部に、運よく、というより努力のかいあって合格し、通うことになったのです。その時、わたしは二十八歳でした。四年間仕事を続けながらでしたが、真面目に大学に通い、今度、大学院に行こうと思いついたのです。学究生活を目指そうというつもりではなく、裁判が終われば、刑務所に収監されるのは確実でしたから、手に職をつけようと思ったのです。大学院が手に職とは面白い発想でしょう。刑務所を出てもどうせまともな就職口はないのだから、大学院に入つたという経歴があれば塾か予備校の講師にはなれるだろうと考えたのです。現在、わたしは、予備校の講師として生計を立てていますから、この計画は今考えたいへん良い計画でした。

大学院に入つたのが三十二歳。つまり、わたしが透谷を本格的に読み始めた年になるわけです。当時、もちろん、裁判を続けていました。

さて、ここで、自分への断念ということを語る資格をようやく得たという気がします。わたしは自分に対してどうして距離を取れるようになったのか。このことの説明として断念という言葉を出